イエスの革命④
＜ゾーエの付与＞

シリーズ～新イエス～

2025/11/16

BCとADで何が変わったか？
～イエス以前と以後～

① 愛の価値

- 愛することには絶対的価値がある

② 全人類に及ぶ救い

- 信仰による救い

③ 目指すべき完全な見本

④ 命の質と意味

- “ゾーエ”の付与

⑤「終わりの時代」

- 終末へのカウントダウン

BC（イエス以前）の命

- 創造時に付与された命（ネフシュ）
  - 「主なる神は、土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた（ナファー）。人はこうして生きる者（ネフェーシュ）となった。」2:7
  - 語源“ナファシュ”:「息」＞「生きる」
- 「神の息」は死と共に神のもとへ帰る
  - 「塵は元の大地に帰り、霊（ルアハ）は与え主である神に帰る。」コヘレト12:7
  - “ルアハ”も「息」の意、「霊」とも訳される
- 中間期に復活があるかどうかが議論に
  - ファリサイ派は「ある」、サドカイ派は「ない」

新約時代（ギリシャ語）の4つの命

- “ビオス”（英語のbio−の語源）
  - 「生活」・「生涯」などの意
  - ルカ福音書だけで使用
- “プシュケ”（英語のpsy−の語源）
  - 肉体に宿る命
- “ゾーエ”（英語のzooはこの言葉から）
  - 「永遠の」と一緒に使われることが多い
- “プニューマ”（英語のpneumonia肺炎の語源）
  - 「息」「風」「空気」、主に「霊」
  - ヘブライ語の“ナファシュ”はこの語に訳される

イエスがもたらした特別なゾーエ

- イエスは神であり創造主であった
  - 「初めに言（受肉前のイエス）があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。」1：1～3
- そもそもイエスの中にゾーエはあった
  - 「言の内に命（ゾーエ）があった。命は人間を照らす光であった。」1：4
  - 「わたしは道であり、真理であり、命である。」
- イエスはゾーエを与えることができる
  - 「子はあなた（父なる神）からゆだねられた人すべてに、永遠の命（ゾーエ）を与えることができるのです。」17:2

イエスからゾーエをいただくには

- イエスを信じること
  - 「それは、信じる者が皆、人の子（イエス）によって永遠の命を得るためである。」3:15,16
- イエスを信じた者はゾーエを得ている
  - 「はっきり言っておく。信じる者は永遠の命を得ている。」6:47
  - 将来（死後に）与えられるのではない
- イエスを信じるとはイエスを「食べ・飲む」こと
  - イエスは言われた。「はっきり言っておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。」6:53

ヨハネ福音書6章54～58節

わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」6:54-58

イエスの肉を食べる

- 「聖餐式」の比喩的表現か？
  - 比喩であることは間違いないが、より深い意味が
  - この個所からクリスチャンが誤解された歴史
- 特別な「食べる」という単語
  - ヨハネ福音書はこの個所だけ“トローゴー”という単語が使われている
  - ただ食べるのではなく「食らいつく」「むしゃむしゃ食べる」という意味
- イエスの肉に「食らいつく」とは？
  - イエスを取り込み、住まわせ、共に生きること
  - ただ見本にすればよいのではない！

イエスの血を飲む

- 「血」とはもちろん十字架で流された血のこと
  - 「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。」ローマ３：２５
- 神と私たちとの新しい契約の印である
  - 「これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。」マタイ２６：２８
- 「飲む」とは自分のためであったと認める
  - 私の罪のために流された血であるとありがたく受け取ること

“ゾーエ”と“プシュケ”

- ヨハネは“プシュケ（肉体の命）”とゾーエを注意深く使い分けている
  - 「自分の命（プシュケ）を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命（プシュケ）を憎む人は、それを保って永遠の命（ゾーエ）に至る。」12:25
  - ここでの「愛する」は「執着する」の意
- プシュケは「捨てる」という文脈で使われる
  - 「良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」10:11
  - 「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない。」15:13

“プシュケ”を捨てて“ゾーエ”を得る

- “プシュケ（肉体の命）”は「捨てる」ためにある
  - これに「執着する」者はそれを「失う」
- 「捨てる」とは自分のために使わないこと
  - 「死ぬ」ことだけが「捨てる」ことではない！
  - 自分の利益を「捨てて」誰かの役に立つこと
  - “プシュケ”は捨てることこそ「愛」である
- 「捨てる」ことで「受け取る」
  - 「わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してくださる。」10：17
  - イエスは十字架でプシュケを捨てゾーエを得た

イエスの革命～ゾーエの付与～

- 愛なる神は人間に「永遠の命（ゾーエ）」を与えようと思われた
  - 神に背いている人間にその資格はないが
- 人（イエス）となって地上に来られ自らの命を捨てることで信じる者にゾーエを付与された
- イエスの肉を食べ、血を飲むことこそイエスを信じることである
  - それはこの世の命を誰かのために使うことである
- この世の命（プシュケ）を正しく使うことが永遠の命（ゾーエ）に通じる道である

イエスの革命～ゾーエの付与～

- 愛なる神は人間に「永遠の命（ゾーエ）」を与えようと思われた
  - 神
- 人（ 命を捨て れた
- イエ スを信じ
  - そ である
- この世の命（プシュケー）を正しく使うことが永遠の命（ゾーエ）に通じる道である

これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

ヨハネ福音書20章31節